

ロシア・子どもの本の周辺

Kovnip

カスチョール

30

特集「戦争と子ども」

誌上展覧会

北国を照らしたスペインの太陽 V.ドゥビードフ

新連載

ロシアの民衆暦

ロシアの学校と子どもたち

ことわざの小箱

料理 キエフ風カツレツ



ロシアの子どもたちを救出した日本船

—知られざる「陽明丸」探索記—

北室 南苑

人を傷つけるのが人間なら、危険を顧みず他人を救おうとするのもまた人間——戦争の記録は私たちにそう痛感させます。十月社会主義革命（1917年）が起こって間もないころ、ロシア全土に広がった内戦に阻まれて疎開先から故郷へ帰れなくなったロシアの子どもたちを無事に親元まで送り届けた日本の船員たちがいました。カスチョール第二回スタディー・ツアーへの参加がきっかけとなって当時のことを調査された北室南苑さんに、長らく忘れられていた歴史のひとこまについて語っていただきました。

（編集部）

はじめに一 戦争という暴力一

戦争とは太古から続いているきわめて原始的なかつ本能的な集団的暴力の行使である。刑法犯罪との唯一の違いは、その暴力行為を行使する集団が一定の規模以上の人数であること、政治的に統率され組織化されたものであり、敵への殺傷行為は犯罪ではなく、むしろ賞揚される行為であることが保証されているか否かである。まさにチャップリンの映画「殺人狂時代」で、死刑になる主人公の殺人犯が叫ぶ「一人を殺せば殺人者、100万人を殺せば英雄」という言葉そのものである。

北室南苑（きたむろ なんえん）

書・篆刻家、著述業。金沢市在住。日本篆刻家協会理事、石川県日中友好協会理事、石川県美術文化協会会員。人道の船陽明丸顕彰会会長及顕彰館館長、北校舎会会長。主な著書は「篆刻アート」（里文出版）、「漢字の周辺」、「篆刻フンダーランド」、「漢字は面白い」（「北國文庫」連載中）。

また一方、西洋諸国では、「汝殺すなかれ」と説く宗教的理念との矛盾もありながら、近世以降の啓蒙主義的理性を重要視する思想的潮流が強まっていた。当時、帝国主義が絶頂に向かっていた彼らには、この太古から続いている原始的な集団的暴力行為をなんとか、「理性に添ったもの」として意義付ける必要があった。そのた

●内戦と子どもたちの疎開

1917年にレーニン率いる社会主義政権が発足して間もなく、新政権の打倒をめざすさまざまな勢力（白衛軍）が旧ロシア帝国領の各地で反乱を起こした。白衛軍に加わったのは上流階級出身の将校やコサック部隊、旧帝政下の非ロシア地域支配者たちだったが、ドイツとの単独講和に踏み切った新政権を挾撃するように日・英・米・仏等が三方から派遣した軍隊が各地でそれを支援した。その結果、白衛軍と赤軍（政府軍）との間の熾烈な内戦は1922年まで続いた。

そんな中、ウラル地方へ疎開していた現ヤンクトペテルブルクの子どもたち（大半が中・上流階級の子弟

だったが、労働者家庭の子どもも含まれた）が、戦況の悪化で西方への帰路を絶たれる。子どもたちをウラジオストクまで移送したアメリカ赤十字から日本外務省に「800人のロシアの子どもたちをシベリア鉄道で親元へ帰すのに協力してほしい」と依頼が入った1920年5月の時点で、子どもたちが親元を離れてから2年が経過していた。シベリア鉄道が日本軍の制圧下にあったが故の依頼であったが、米軍に続いてロシアから撤退することを考えていた日本軍は受け容れず、陽明丸のオーナー勝田銀次郎氏が子どもたちの遠洋輸送を買って出ることとなった。

（編集部）

「陽明丸」との出会い

—「ムロラン」と「キタムロ」の縁

以上の経緯により、これらの子どもたちを「ヨウメイマル」という日本の船が運んで助けたという話が突然私の目の前に降ってきたのであった。2009年秋、田中先生のご好意で、サンクトペテルブルク訪問ツアー（カスチャールの第二回ロシアスタディー・ツアー）に参加させていただいたことがそもそも事の始まりであった。これについては、既に何がしかの報道もなされているので、ご存知の方もおられるかもしれない。

このツアーの後半、筆者はサンクトペテルブルク市歴史文化児童図書館二階ホールにて「ロシア絵本と篆刻融合—あるアバンギャルド展」という一風変わった個展を開かせていただいた。

その会場で、ロシア女性オリガ・モルキナ女士（この人の祖父は、陽明丸に乗船していた子ども）より突然難しい依頼を受けたのである。



カスチャールのスタディー・ツアー中に、オリガ・モルキナ女士から突然「直訳」を受ける筆者（右）

「90年前にロシアの子どもも難民を救った日本人船長のその後の消息を探索してほしい」というのである。だが、その時の私はいかにして個展のオープニングセレモニーを無事に終えるかということであらう。頭がいっぱいの状態であったため、「そんな古い話の調査は、困難を極めるから、私

にはとても無理です。」と、心は上の空で依頼を断るのが精一杯であった。ところが、今度は日本語が堪能な年上の女性を伴い、史料らしきものを持参して再度依頼にやってきたのである。

「あなたの名前はキタムロさんですよね?」「ええ、そうですが、何か?」「お名前、キタムロと室蘭とは何か関係がありますか?」

「室」繋がりのロシアとの縁は奇しくもこの会話が発端であった。

2009年9月26日のこと。その年上の威厳のある女性は、史料の中の真っ白い夏用の制服を身に纏った凛とした姿の船長らしき人の写真を示し、「再度あなたに調査を依頼したいので、是非引き受けてほしい。これまでもロシアを訪れた幾人もの日本人に同様の依頼をしてきたのだが、なかなか引き受けてくれる人がいなかった。それで是非ともあなたにお願いしたい。」といい、二人のまなざしは筆者の顔に注がれたまま、一向にそれることがなかった。

「事情はわかりました。確実なお約束はできないが、取りあえず資料だけはお預かりしましょう。」そう思わず言ってしまったときには、パーティはもう終わりかけていた。

個展のオープニングは盛会のうちに終了し、ホテルに戻る途中で先ほどのロシア女性の誠に超現実的な会話が気に入り、何やら得体の知れない予感のようなものがジワッと心の芯に忍び寄ってくるのに気付いた。（もしかして今回のロシアの初個展の本当の意味は、この女性との出会いだったのだろうか。）ホテルの部屋でもう一度もらった名刺と史料をじっくりと読んでみた。史料には「1920年頃のロシア内戦時、戦火を逃れて救出されたロシアの子ども難民800人が日本船ヨウメイマルに乗せられてウラジオストクから出航。最初の寄港地が室蘭」とある。（なるほど、それでキタムロとムロランと繋げてみたのか。）

「陽明丸」との出会い

—「ムロラン」と「キタムロ」の縁

以上の経緯により、これらの子どもたちを「ヨウメイマル」という日本の船が運んで助けたという話が突然私の目の前に降ってきたのであった。2009年秋、田中先生のご好意で、サンクトペテルブルク訪問ツアー（カスチョールの第二回ロシアスタディー・ツアー）に参加させていただいたことがそもそも事の始まりであった。これについては、既に何がしかの報道もなされているので、ご存知の方もおられるかもしれない。

このツアーの後半、筆者はサンクトペテルブルク市歴史文化児童図書館二階ホールにて「ロシア絵本と篆刻融合—あるアバンギャルド展」という一風変わった個展を開かせていただいた。

その会場で、ロシア女性オリガ・モルキナ女士（この人の祖父は、陽明丸に乗船していた子ども）より突然難しい依頼を受けたのである。



カスチョールのスタディー・ツアー中に、オリガ・モルキナ女士から突然「直訳」を受ける筆者（右）

「90年前にロシアの子どもも難民を救った日本人船長のその後の消息を探索してほしい」というのである。だが、その時の私はいかにして個展のオープニングセレモニーを無事に終えるかということであらう。頭がいっぱいの状態であったため、「そんな古い話の調査は、困難を極めるから、私

にはとても無理です。」と、心は上の空で依頼を断るのが精一杯であった。ところが、今度は日本語が堪能な年上の女性を伴い、史料らしきものを持参して再度依頼にやってきたのである。

「あなたの名前はキタムロさんですよね?」「ええ、そうですが、何か?」「お名前、キタムロと室蘭とは何か関係がありますか?」

「室」繋がりのロシアとの縁は奇しくもこの会話が発端であった。

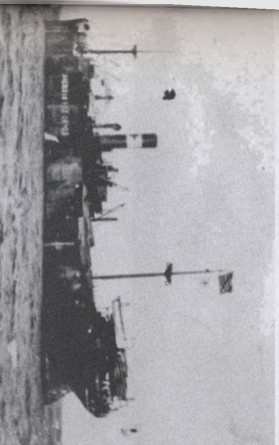
2009年9月26日のこと。その年上の威厳のある女性は、史料の中の真っ白い夏用の制服を身に纏った凛とした姿の船長らしき人の写真を示し、「再度あなたに調査を依頼したいので、是非引き受けてほしい。これまでもロシアを訪れた幾人もの日本人に同様の依頼をしてきたのだが、なかなか引き受けてくれる人がいなかった。それで是非ともあなたにお願いしたい。」といい、二人のまなざしは筆者の顔に注がれたまま、一向にそれることがなかった。

「事情はわかりました。確実なお約束はできないが、取りあえず史料だけはお預かりしましょう。」そう思わず言ってしまったときには、パーティはもう終わりかけていた。

個展のオープニングは盛会のうちに終了し、ホテルに戻る途中で先ほどのロシア女性の誠に超現実的な会話が気に入り、何やら得体の知れない予感のようなものがジワッと心の芯に忍び寄ってくるのに気付いた。（もしかして今回のロシアの初個展の本当の意味は、この女性との出会いだったのだろうか。）ホテルの部屋でもう一度もらった名刺と史料をじっくりと読んでみた。史料には「1920年頃のロシア内戦時、戦火を逃れて救出されたロシアの子ども難民800人が日本船ヨウメイマルに乗せられてウラジオストクから出航。最初の寄港地が室蘭」とある。（なるほど、それでキタムロとムロランと繋げてみたのか。）

「ヨウメイ丸」と 「カヤハラ」船長を追いかけて

当初わかっていたことは、たった二つのキーワード「ヨウメイ丸」という船名と「カヤハラ」という船長の苗字だけであった。パソコンのインターネット検索作業を早速始めた。試行錯誤の末、「ヨウメイ丸」は「陽明丸」にはほぼ間違いないであろうと推定した。そして、大正時代に外国航路を運航していた船で「陽明丸」なる船を所有していたのは「大洋汽船株式会社」であった。この会社は大正期の船舶業界の目まぐるしい浮沈とともに資本の難合集散の果て「大洋日本汽船株式会社（神戸市）」に系統的に繋がっていることが判明した。つまり、陽明丸は貨物船を改造したものであったのだ。



神戸市での陽明丸

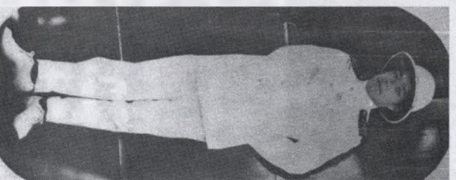
陽明丸自体については、古い時代ゆえに詳細な情報は残されていないものの、この船を所有していた会社の経営者が「勝田銀次郎」という人であること、さらに勝田銀次郎の評伝がかなり以前に出版されていることもわかってきた。評伝にはロシアの子ども難民を救ったことは、ほんの敷衍しか書かれていなかったが、勝田銀次郎という人物はいわゆる世間というところの船成金であったわけではなく、社会奉仕や慈善

事業をおこなっており、後に衆議院議員や二期にわたる神戸市長も務めた人物であったことに驚かされた。

年か明けて2010年。船長「カヤハラ」という名前がなかなか特定できずにいた。筆者は自費で幾度も東京や神戸の図書館に出向き、船長「カヤハラ」の名を調査し続けていた。5月には新聞「室蘭民報」に探検記事が載った。7月には月刊『KAIUN』（(株)日本海運集会所発行)に「幻のカヤハラ船長」という題で人探しの記事が載せていただいた。しかし、この年はこれ以上の進展はなく年が暮れた。

マスコミの協力も得て探検が進展 ——茅原船長と手記の発見へ

明けて2011年6月26日付、産経新聞にマスコミ発の船長探しの記事が突然載ったのである。そういえば1か月ほど前、ロシア駐在の記者が、「オリガ・モルキナ女史から記事を依頼されたが、金沢在住の北室さんに以前からこの人探しを頼んでおり、それ以来個人的に何ら得るところもないだろうに、熱心に探してくれている。記事になるなら彼女のことも是非書いてほしい」と伝言されたのだということや、記事の中に筆者の名前を載せることの承諾を得るための連絡が一度きりだったことを思い出したのだ。



当時の茅原船長